

「きのふこそさなへとりしか」の考察

——古今和歌集における本歌取りの要素をめぐって——

鎌倉 暄子

一

花ざかりに京を見やりてよめる

そせい法し

みわたせば柳桜をこきまぜて宮こぞ春の錦なりける

(古今・五六)^(注1)

は、現代の我々からすれば、一見何の変哲も無い歌のように見うけられるが、古今集当時はユニークな歌、斬新な歌として人々に持て囃され、賞讃された歌である。当時の錦の概念は、

竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえ
なむ (古今・二八三)

霜のたてつゆのぬきこそよわからし山の錦のおればか

つちる (右同・二九一)

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそす
れ (右同・二九六)

などの多くの用例が示す通り、全て秋の錦、山の錦、紅葉の錦であった。しかるに冒頭歌は、秋の錦に対して春の錦、山の錦に対して京の錦、紅葉の錦に対して柳桜の錦という趣向を凝らし、錦の概念を百八十度転回させた斬新な発想のものである。^(注2) 当時の人々に如何ほど感銘を与えたかは想像に余りある。また、

かねみのおほきみにはじめて物がたりしてわかれけ
る時によめる
みつね
わかるれどうれしくもあるかこよひよりあひ見ぬさき
になにをこひまし (古今・三九九)

における「別れるけれど嬉しい」という発想も、「別れは悲しい」という当時の固定観念や発想の中にあつて、一入ユニークなものである。

すがるなく秋のはぎはらあさたちて旅行く人をいつとかまたむ（古今・三六六）

けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき（右同・三六九）

いのちだに心にかなふ物ならばなにか別のかなしからまし（右同・三八七）

が示すように、「別れは悲しい」という心情は、古今東西変ることのない心情であり、それは平安時代に限らず各時代の文献に数多く見られることでもある。歌のみならず俳句にしても、例えば、

麦の穂をたよりにつかむ別哉（芭蕉）

の如き生別、

手のひらにはかなく消ゆる蛍かな（去来）

のような死別を問わず変わるところはない。平家物語その他に見える「待つ宵の小侍従」と「ものかはの蔵人」の例を引用するまでもなく、再会の望みがない時の悲しみ辛さははかりしれないものがある。古今集三九九番歌は同じ別れでも、「再会の楽しみがあれば別れだって嬉しい」と表現することによって、従来の「別れは悲しい、辛い」とい

う発想を打破したところに、その斬新さとユニークさが認められ、当時の人々の目を見はらせたのであり、古今集に載録されたことも至極当然のこととして首肯される。^{（注3）}このような歌は右二首に止まるものではない。万葉集における山辺赤人の歌でも同様のことは指摘できる。例えば名歌として有名な、

み吉野の象山のまの木末にはここだもさわく鳥の声かも（巻六・九二四）

ぬばたまの夜のふけゆけばひさ木おふる清き河原に千鳥しば鳴く（巻六・九二五）

の如き、自然を有りのままの自然として詠んでいる歌がそれである。今日でこそ普通のこととして何ら目新しさはないが、赤人の頃までは、自然を純粹に自然として把えることはなく、人事関係においてしか詠まれなかった。しかし、赤人は自然を有りのままの自然として把えており、その時代においては極めて斬新で独創的であったと言わねばならない。前例の全くないところに新しいものを創造するということは非常に素晴らしいことであり、絶讃に価することでもある。

二

題しらず

よみ人しらず

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて
秋風の吹く(古今・一七二)

の解釈は、古注より現代の注釈書に至るまで一致しており別に問題はない。そして、一見して容易に解釈される歌であり、何の変哲もない歌とさえ思える程である。しかし、この歌と同じ表現形式「きのふこそししか」をもつ歌が万葉集に四例、

きのふこそ君はありしか思はぬに浜松が上に雲にたなびく(巻三・四四四)

島山をい行き廻れる 河副の丘辺の道ゆ きのふこそ吾が越え来しか 一夜のみ寝たりしからに 峰の上の桜の花は 瀧の瀬ゆ散らひて流る 君が見む其の日までは あらしの風な吹きそと 打越えて名に負える社に 風祭りせな(巻九・一七五一)

きのふこそ年ははてしか春霞春日の山にはや立ちにけり(巻十・一八四三)

きのふこそ船出はせしかいさなとりひぢきの灘を今日見つるかも(巻十七・三八九三)

と見えるが、ここに詠まれた「昨日」はすべて現実の「昨日」である。中には三八九三番歌に対して、

「昨日」は文字通りの昨日で無く、船出をしたのは、ほんの昨日のやうに思つてゐるに、の意(澤瀉・注釈)

一首ノ意ハ古今ノ昨日コソ早苗取シカトヨメルニ似タリ。(代匠記・精)

とする異なつた解釈もあるが、地名「比治奇の灘」の所在が明確でなく、確かなことは断言できない。ただ、歌の配列からすると「比治奇の灘」は、北九州市の北方、山口県豊浦郡の西方海上と考えるのが自然である。したがって、この例も現実の「昨日」と解釈する方が歌意にふさわしく、代匠記(精)や注釈のように解釈しなければならないという必然的な理由はない。平安時代以降になつても、万葉的表現発想は脈々として生き続けており、

たつはるのこころを

柿本人麿

きのふこそつきはすぎしかいつのまにはるのかすみの
たちにけらしも(万代・一)

七月一日のあしたにのみ侍りける

鎌倉石大臣

昨日こそ夏はくれしか朝戸いで衣手さむし秋の初風
(新統古今・三四七)

うらむること侍りて、さらにまうでこじとちかごと
して、ふつかばかりありてつかはしける 謙徳公
別れてはきのふけふこそへだてつれちよしもへたるこ
ちのみする(新古今・一二三七)

返し

恵子女王

昨日ともけふともしらずいまはとて別れしほどの心ま

よひに（右同・一二三三）^{（註4）}

おなじ心を（二夜へだてたる） 西園寺前内大臣女
さりともしけふをばまちし昨日こそ夜がれになれぬ心
なりけれ（風雅・一〇八四）

のような事例によってもその間の事情はわかる。しかるに、古今集一七二番歌の「昨日」は、同じ表現形式をとっていても、その内容は現実の「昨日」ではなく、明らかに心理的な「昨日」である。この歌は「題しらず」「読人しらず」の歌であるから、撰者時代より古い歌ではあるが、冒頭歌の「みわたせば…」の歌同様、古今集当時の人々には、非常にユニークで斬新な歌として迎えられたことは容易に推察される。その証拠に、例えば、

昨日こそ秋はくれしかいつのまにいはまの水のうすこ
ほるらん（千載・三八七）

きのふこそおつる木のはをながめしかけさ又雪の空に
ちるらん（拾玉・一二六二）

昨日こそ霞たちしか郭公またうちはぶくこそぞのふる声

（拾遺愚草・一五二二）

きのふこそやくとはみしか春日野にいつしかけふぞわ
かな摘みける（後葉和歌・一四）

いつのまにもみぢしぬらむきのふこそしぐれそめしか
神なびのもり（万代・一一九二）

の如く、全く同一表現形式をとった歌が詠み継がれて行ったことは、この一七二番歌を典拠にしているのと思われ。いわばこの歌がある意味での手本と仰がれた証左であり、当時の人々の価値評価を知るよすがともなっている。そして、その表現形式は異なるが、もっと直接的な表現をした歌、

かぞふればやとせへにけりあはれわがしづみしことは
きのふと思ふに（千載・一二六二）

哀なり我がもとゆひにおく霜のふり分がみは昨日と思

ふに（新葉和歌・一二二九）

などの例も見られ、その中には、

いつのまにおしねかるまで成りにけむなはしろせしも

昨日と思ふに（拾玉・四七八八）

といった、一七二番歌を本歌として詠んだのではないかと
思われるほどのものまで存在するのである。また、

わかれしはきのふばかりとおもへどもみちにてとしの

暮れにけるかな（続詞花・六九八）

きのふまでかへすやまだと見しほどになはしろ水はか

げすみにけり（万代・一八九）

などの事例が物語っている通り、「昨日」という語そのものも現実の「昨日」ではなく、心理的な「昨日」の意味で詠み継がれているのである。

世中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる（古今・九三三）

こぞといひことしといへどわれはただきのふけふとも

おもほゆるかな（源賢法眼集・五）

の如き、現実の「昨日」として用いられた事例を参照し比考すれば、その違いが明白であり、「昨日」をはじめて心理的「昨日」として扱えた歌が、いかにユニークかつ斬新なものであり、人々の共感を呼び興し共鳴させたかは、大凡推察できることである。このように万葉集と表現形式は同一でありながら、現実の「昨日」を心理的な「昨日」に置きかえたところに、新鮮でこれまで見られなかった興趣も醸し出され、異った意味をも持たされたわけで、かかる趣向は正に一種の本歌取りを思わせるものである。勿論、本歌取りと言えは新古今集、新古今集と言えは本歌取りと言われている通り、本歌取りの歌は新古今集において洗練され、その粹を極めていると見なされる。今言及している古今集一七二番歌の場合は、仮りに本歌取りと見なしたとしても、新古今集の場合のそれとは非常な隔たりがあることは言うまでもない。周ねく知られた本歌取りの歌を一例挙げてみよう。

谷河のうちいづる浪もこゑたてつ鶯さそへ春の山かぜ

（新古今・一七）

は、古今集の次の二首を本歌としたものである。

谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春の

はつ花（一一二）

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべには

やる（一一三）

つまり、新古今集一七番歌の「谷河のうちいづる浪もこゑたてつ」は、古今集一二番歌をふまえて詠み、「鶯さそへ春の山かぜ」が古今集の一三番歌を本歌としていることは、当時の人々の十分知悉していたところである。この様に、本歌がどの歌かということ^(注5)を他の人々に分らせながら、本歌と全く異なった趣向をいかに凝らすかによって、本歌取りの歌の面白味や力量があったのである。しかし、この様な本歌取りの典型ともいうべき歌は、新古今集時代に突如として現われたものではなく、その兆しは古い時代から見られたと考えられる。勿論、本歌取りそのものを、院政期になって開発され、新古今時代に盛んに行われた詩法としての「本歌取」^(注6)と規定し、それ以前の万葉集や古今集等に見られる、先行する特定の歌を意識し、その歌詩の一部を吸収しつつ作歌すること^(注6)

を本歌取りとは認めない説も見られるが、歌論書の本歌取りの定義づけはさておき、徐々に確立していったその過程

の中で、一つの歌を把えてみることも、歌の理解を別の観点から深めるということになれば、意味のないことではなからう。

三

あづまの方へ友とする人ひとりふたりいざなひていきけり、みかはのくにやつはしといふ所にいたれりけるに、その河のほとりにかきつばたいとおもしろくさけりけるを見て、木のかげにおりて、かきつばたといふいつもじをくのかしらにすゑてたびの心をよまむとてよめる

在原業平朝臣

唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ（古今・四一〇）

の歌は、誠に当意即妙に詠まれた歌として古来称讃されているのであるが、しかしこれとても、

から衣服櫛の里の孀待つに玉をしつけむよき人もかも

（万葉・九五二）

の歌を踏まえたものかもしれないとする、

「から衣」「着なる」「つま」という三拍子揃った付合せは、萬葉以後まさにこの歌を初出とする。作者在原業平は「か・き・つ・は・た」の折句歌の頓作に萬葉九五二の作を応用したというようなことが、もし言い

うるとすれば…（注7）

との佐竹昭広氏のご論考もあり、業平歌にも先行歌の存在を想定することは、あながち荒唐無稽とは言われないであろう。

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふいつもじをくのかしらにおきてよめる づらゆきをぐら山みねたちならしなくしかのへにけむ秋をしる人ぞなき（古今・四三九）

は、前掲の業平歌と手法や趣向を全く同じくした歌と見なして差支えない。ただ貫之歌は物名歌に入れられ、業平歌は羈旅歌に入れられているという部立の違いはあるが、それは編纂者の編纂方針に基づくものと見なされる。したがって、貫之歌は明らかに先行の業平歌を踏襲していると見てさして誤りはあるまい。貫之には他にも本歌取りの歌とおぼしき歌が見られる。例えば、

はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家のあるじかくさだかになむやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる づらゆき

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける（古今・四二一）

の歌にしても、深養父集五三番歌

人はいさ我はなき名のをしければ昔も今もしらずとを
いはむ

を底辺において詠んだのではないかと思わせられる。この
深養父集の歌は、古今集（六六〇）では作者が元方になっ
ており、後撰集ではおほつぶねになっている。そして古今
六帖や新撰万葉集にも載せられているということは、貫之
の頃にはかなり広く流布されていたものと推察され、深養
父歌との前後関係は明確ではないが、歌の洗練され具合
等からすると、それを念頭において詠まれた感は否めな
い。また同じ物名歌に、

はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて時のう
たよめと人のいひければよみける 僧正聖宝

花のなかめにあくやとてわけゆけば心ぞともにちりぬ
べらなる（古今・四六八）

の例も、前掲した業平や貫之の歌と揆を一にしたものと言
える。このように折句的技巧を凝らした歌や物の名を詠み
込んだ歌などが、かくも即妙に詠まれた背景には、やはり
それに先立つ万葉集の物名歌の存在、そしてまた、それが
流布されていた事実などを無視することは出来ない。例え
ば

刺名倍尔 湯和歌世子等 櫟津乃 檜橋從來許武

狐尔安牟佐牟

右一首傳云 一時衆集宴飲也 於時夜漏三更所聞

狐聲 尔乃衆諸誘 奥麻呂曰 關此饌具雜器狐聲河

橋等物 但作歌者 即應聲作此歌也（卷十六・

三八二四）

詠酢醬蒜鯛水葱歌

醬酢尔 蒜都伎合而 鯛願 吾尔勿所見 水葱乃葱

物（卷十六・三八二九）

などの、長忌寸意吉麻呂の一連の即興歌をはじめとする卷
十六に見られる物名歌がそれである。これらは一種の機智
による言葉の遊戲という一面もあるであろうが、即興的に
いろいろな物の名を詠み込み一座に供すなどということ
は、歌そのものが当時の人々の生活に直結し、生活の一部
であったからこそなしたことであろう。そして、その様
なかたちで人々に受け継がれていくなかで、古今集の物名
歌や本歌取りの歌などが詠まれる素地も出来上がってい
ったように思われてならない。

四

まがねふくきびの中山おびにせるはそたに河のおとの
さやけさ

この歌は、承和の御べのきびのくにの歌（古今・一

〇八二

この歌は、吉備の国の民謡であつたものが大歌所の歌として採録され、仁明天皇の大嘗会に謡われた歌であるが、もとと万葉集の、

大王の御笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ（巻

七・一一〇二）

が伝承されているうちに吉備の国の地名が詠み込まれて、吉備の民謡歌として流布したものであろう。民謡は歩くとも言われるのはこのような事情をさすものである。地名を変えただけでその国の民謡になっていくことは現在でもなお見られる現象である。当時の人々は、即興的に一句ないし二句、時には一語だけを言い変えることにより、別の歌を作り出していった。そしてそれらは、類歌・異伝歌というよりは全く別の歌として人々に受け入れられ、ほめはやされ、受け継がれていき、その中のいくつかは、古今集をはじめとする勅撰集にも載録されることにもなったかと思われる。勅撰集が同じ歌を二度載録することは有り得ないと言われているにもかかわらず、実際には相当数の重出があることは夙に指摘されているところであるが、

少数の不注意による例外を除いて、撰者の意図によってなされたもの^{（注）}

という奥村恒哉氏のご指摘もある通り、ほんのわずかの語

句の相違による異伝歌と思われるものまでも、全く違った別歌と認識していたのではないかと思われるふしもある。新古今集ではその序に、

万葉集にいれる歌は、これをのぞかず、古今集よりこのかた、七代の集にいれる歌をば、これをのする事なし

と言っているが、実際には七代集との重出歌がないわけではない。しかし、新古今的な魅力を有する新風がこよなく重大であつて、伝統を重んじての古歌の採択でも、できるだけ伝統を推進させるようなものに重点をおいたところに面目躍如たるものがあり、古歌の採歌方針もそこにあつたのであろう。

五

このように一句二句あるいは一語の違いでさえ別歌として意識され、そしてそれはそれで面白さも趣向もあつたわけである。しかるに、古今集一七二番歌における「昨日」の意味の変化、つまり、現実の「昨日」の意味でしか詠まれていなかったものを心理的な「昨日」に置きかえ、全く別の趣向の歌を詠んだところに、この歌の大きな魅力と趣向や新味がにじみ出て、おのずから価値も認められたのであろう。そしてそれ以後も同趣向の歌が多く詠まれる契機

にもなったものと考えられる。このような手法、つまり、表現形式も語句も変えることなく全く違った内容の歌を表現するということは、一種の本歌取り的要素があると言つてよいのではあるまいか。このことについては既に、

本歌取りといふのは、周知の如く、古歌の中の一句もしくは數句を引用して複雑な餘情を出さうとする和歌修辭法である。その起源は、遠く萬葉集の頃にあるのであつて、萬葉集も第四期頃になると、頻繁にあらはれ來つてゐる。が、まだこれが流行繁昌といふところまでには至つてゐないやうだ。然るに、平安朝になると、漸次流行の形勢となる。古今集や紀貫之の歌には、勿論明らかに本歌取りの歌が発見出來る^(在り)。との小島吉雄氏のご指摘もある通り、少くとも本歌取りの原初的形体としての存在は否定すべくもない。

延喜御時月次屏風に

紀貫之

おほ空をわれもながめてひこぼしのつまつよさへひとりかもねん(新古今・三一三)

の歌は貫之集にも見られ、その詞書に、

延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うちうち

の仰にてたてまつれる御屏風の歌廿七首

とあり、貫之の歌であることは動かない。これについて、

岩波古典大系「新古今和歌集」は拾遺集から取ったとは言

っているものの、万葉集の

足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜を一人かも寝む

(卷十一・二八〇二或本歌曰)

と同一歌を本歌とする本歌取りの歌だとされている。この歌を直接本歌としたか否かはおくとしても、「ひとりかもねむ」という表現は、

明日よりは我が玉床を打ち払ひ君とい寝ずてひとりか

も寝む(卷十・二〇五〇)

の七夕の歌をはじめとして、

衣手にあらしの吹きて寒き夜を君来まさずはひとりか

も寝む(卷十三・三二八二)

……別れにし妹が着せてしなれ衣袖片しきてひとりかも寝む(卷十五・三六二五)

などのかなりの例が示すように、当時の常套句であつたことは否めず、貫之の歌がこれらの歌を下敷にしたものであることは十分に推察できることである。新古今集の撰者もまたそのように認識したからこそ載録したのではあるまいか。

題しらず

深養父

昔みし春はむかしの春ながら我が身ひとつのあらずも有るかな(新古今・一四五〇)

は深養父集三七番にも見られる歌であるが、これも明らか

に、諸注釈書が指摘している通り業平の、

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身

にして（古今・七四七）

を踏まえたものであり、古今集の時代に既にこのような本歌取り的なものが見られるのは刮目してよい。それが本歌取りの最盛期に編纂された新古今集に載録されたいうことは、古今集時代に明らかに本歌取り的な歌が存在した証左であり、そこに大きな意味があると言わねばならない。

今問題にしてきた古今集一七二番歌、

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなばそよぎて

秋風の吹く

も、このような一種の本歌取り的な流れの中で把えて解釈することが如何に重要であるかは論を俟たないであろう。というよりもむしろ、本歌取りの流れの線上に把えてはじめて、真の解釈ができると言うべきである。しかも、既述してきたことを総合しながら考察するとき、本歌取りの展開して行った過程がおぼろげながらも把握でき、異説の多い本歌取りの定義づけにも、解明の一役を担っていると言いうことができよう。

注

（1）引用例の本文は左記によった。

○万葉集——「万葉集△桜楓社▽」

○万葉集以外の歌集——「新編国歌大観」

（2）この点については、鶴久先生の御教示による。

（3）注（2）に同じ。

（4）一条摂政御集一〇一・一〇二にも同じ歌が見られる。

（5）藤平春男「本歌取について（香椎潟第26号）」

なお、氏には「本歌取り私考（解釈と鑑賞50巻1号）」に、同様な論考が見られる。

（6）注（5）に同じ。

（7）佐竹昭広「万葉集本文批判の二方法」（『万葉集校書』所収）

（8）奥村恒哉「三代集の重出歌とその問題（国語国文22巻9号）」

（9）小島吉雄「新古今和歌集の研究」